

患者さんと医師のギャップ

河北博文 ● 社会医療法人河北医療財団理事長

健康は「何ものにも代えがたい財産」と言われます。本誌読者の皆様も常に背中に背負っているのは従業員やその家族が健やかであること。その他さまざまな重圧から体調不良になるリスクに囲まれていると言ってもいいでしょう。しかし一方で、医療の技術・研究は目を見張るスピードで進展しています。当欄で執筆いただくのは、昭和3年に杉並区で誕生した中核病院、河北総合病院をはじめとする河北医療財団の先生方です。ご期待ください。

ピーター・ドラッカーさんと2度お話しことがあります。ドラッカーさんはマネジメントの神様と思われていますが、「マネジメントはお金を儲けることである」と言われるとても悲しい顔をしました。マネジメントは、よりよい社会を創ること、だと強調されていました。医療もよりよい社会を創る一つの大きな仕事だと考えています。

● 健康の定義

皆さんは「健康」のことを考えます。医師は「病氣」のことを考えます。この違いが大切なギャップなのです。身体的、精神的、社会的に調和がと

れている状態が健康の定義です。精神的には単に精神疾患を指すことではなく、心の揺らぎの治まった状態を考えなければなりません。

● 人生百年時代の生き方

人生100年時代と言われています。今、生まれる子供たちの二人に一人は100歳を超えて生きる可能性が高いと言われています。その中で、命は無限であり、死は敗北であると、死ぬことは日常ではない感覚が広がりつつあります。人間は必ず死を迎えます。死もまた生理であり、私は人間の尊厳は、その人らしいこと、であると考えています。その人

らしく生きる」と言うことは、その人らしく亡くなる。ことも含めて考えられなければなりません。

● 医療における本質的サービス

医療には本質的サービスと表層的サービスがありますが、施設が華美であるとか職員による対応が過度にお客様扱いになっているなど、患者さんや家族にとって、一見、高級そうに見えるものが表層的サービスです。本質的サービスは医療の受診者にとっては専門性が高く、なかなか評価することが難しいことが多いのですが、それを分かりやすく、誰にでも理解できるように説明すること

も本質的サービスの一環です。

診療報酬は、医師が行う医療行為に対する費用弁済が原点だと言われています。今日の医療はもろろん医師の医療行為だけで成り立っているわけではなく、看護師や薬剤師、放射線技師、検査技師、さらに、多種の事務職員などの協力が無ければ行うことは出来ません。これらの人に加えて、土地や建物、医療機器、医療材料の確保も不可欠です。

● 問われるコミュニケーション

社会保険による医療は無制限診療ではありません。あくまでも、社会や国の財政の制限の中に置かれているものです。ところが、患者さんの一部にはその範囲をはるかに超える要求をする人たちがいます。一方、医師は根拠に基づく診療と言いつつ、勘と思いつきのみで行われる診療は少なくありません。

AI（人工知能）が診断と治療に多用される時代に医師の役割とは何でしょうか。患者さんにとって機械と話をすることと人間としての医師と話をすることは大分感じが違うと思います。医師は言語・非言語の

コミュニケーション力が格段に問われることとなります。そして、現在の法律では診療の責任は医師が負うことになっています。ところが、医師はコミュニケーションの研修は殆ど受けておらず、法律の勉強もしていないと言っても言い過ぎではないと思います。

● より良い社会を創るために

病院の経営はその病院が対象と考える患者さんの数が多く来てくれることを望んでいます。ところが、病院はその患者さんたちが治って健康な生活に戻ることとともに、病気の予防を推進することも仕事です。病

院が考えている患者さんが減ること、がよりよい社会なのです。

このように考えてみると相反する

ことがいくらでも列挙できるのが医療です。こんなことを頭の片隅に置いていただければ幸いです。お読みいただければ幸いです。

かわきた ひろふみ 氏

社会医療法人 河北医療財団 理事長・医学博士・MBA(経営修士)
専門分野: 医療政策、医療機能評価
慶應義塾大学医学部卒業、シカゴ大学大学院ビジネススクール修了、慶應義塾大学医学部大学院博士課程修了(病理学)
医療機能の第三者評価のしくみとして現公益財団法人日本医療機能評価機構を設立する。



諸病院協会の役員活動と内閣府・厚生労働省 審議会等の委員を歴任し、長年、医療政策に携わっている。

花粉症

ヘルスな話

花粉症って、つらいですね。ご存じの方も多いと思いますが、スギ花粉エキスによる舌下免疫療法の予防効果が話題となっています。この治療法は、スギ、ヒノキシーズンの終わった6・7月から始めるのが最適です。これまでの水溶液(シダトレン)に続いて、錠剤のシダキュアも発売されます。また、花粉症には、5・6月頃のカモガヤ、オオアワガエリ、秋のブタクサ、ヨモギなども増えています。一度アレルギー検査を受けましょう。



「舌下免疫療法」 お薬を舌の裏側に1~2分

毎年春先に話題になるスギ花粉症は、今や「国民病」と言えます。

最新の花粉症のガイドラインである「鼻アレルギー診療ガイドライン2016」によれば「花粉症の自然治癒を期待するのは困難」であり、かつ「現在、治療または長期寛解を期待できる唯一の方法は、アレルギー免疫療法である」と記載されています。

スギ花粉症に対するアレルギー免疫療法のうち、スギ花粉エキス水溶液および錠剤による「舌下免疫療法」は、これまで皮下注射で行われてきた「皮下免疫療法」のような痛みもなく、何より家庭で治療ができるのが特徴です。これまで使用されているお薬との併用も問題ありません。

なお、上記のガイドラインに治療の副作用としてアナフィラキシー(重症のアレルギー反応)の注意書きはありますが、同時に「有効性と安全性が確認されている」と記載されており、過剰な心配は不要です(口腔内の軽症状もほぼ1カ月以内に自然消滅します)。

舌下免疫療法は、約8割の患者さんで有効性が確認されています。ぜひ、アレルギー専門医による花粉症外来にご相談ください。



社会医療法人 河北医療財団

東京都杉並区阿佐谷の地で、1928年に内科・小児科30ベッドの病院として「河北病院」が誕生。今日に至るまで継続して地域医療の視点を持ち、最終確定診断ができる病院であり、第一級の臨床研修教育を担い、地域の健康生活を支援することを当財団の中心に置き、早91年。急性期・回復期・維持期・介護と各病院や施設を約30か所運営。これからも100周年にむかって新しい夢と現実をつくっていききたい。